

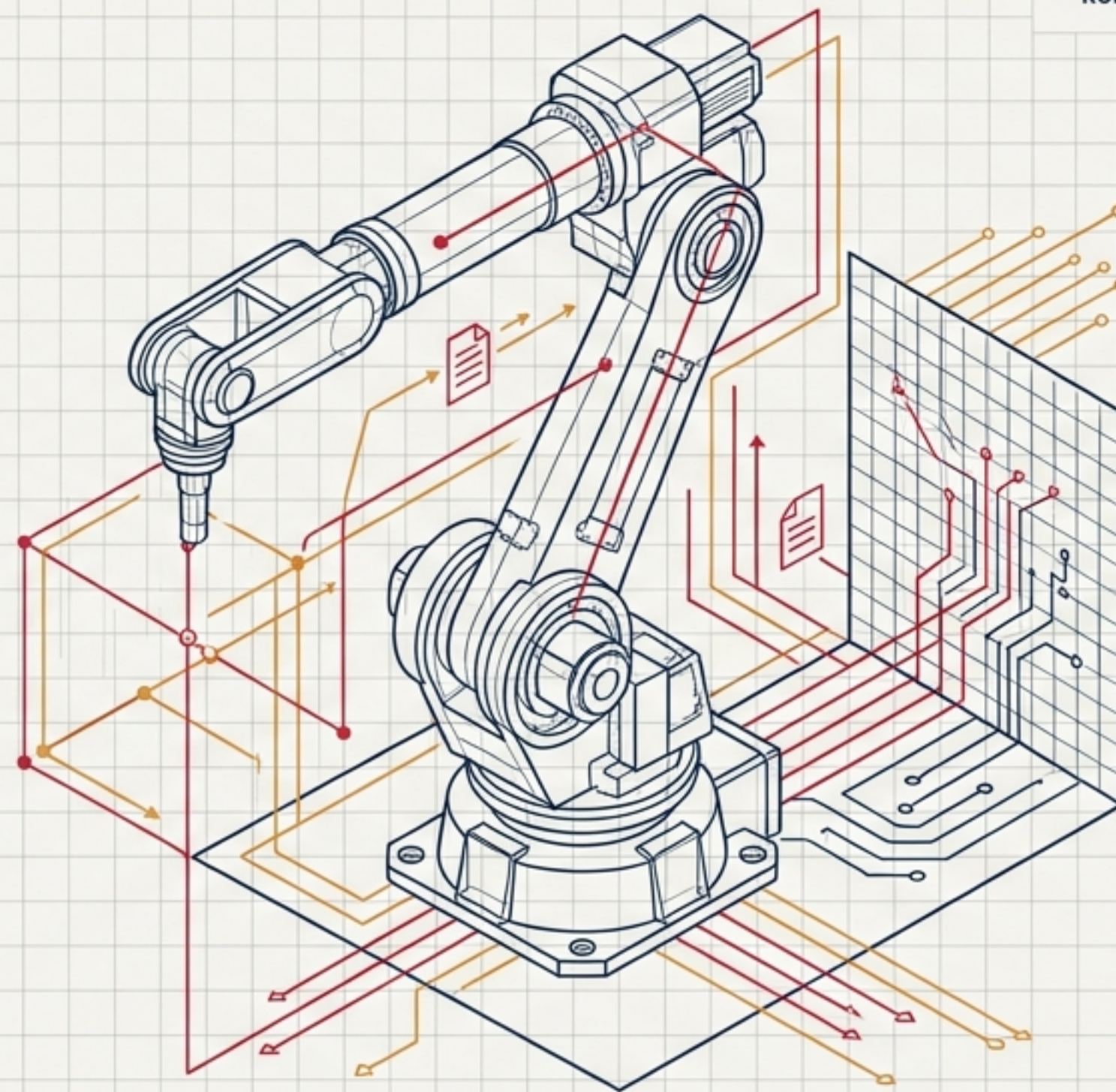


X SQUARE
ROBOT

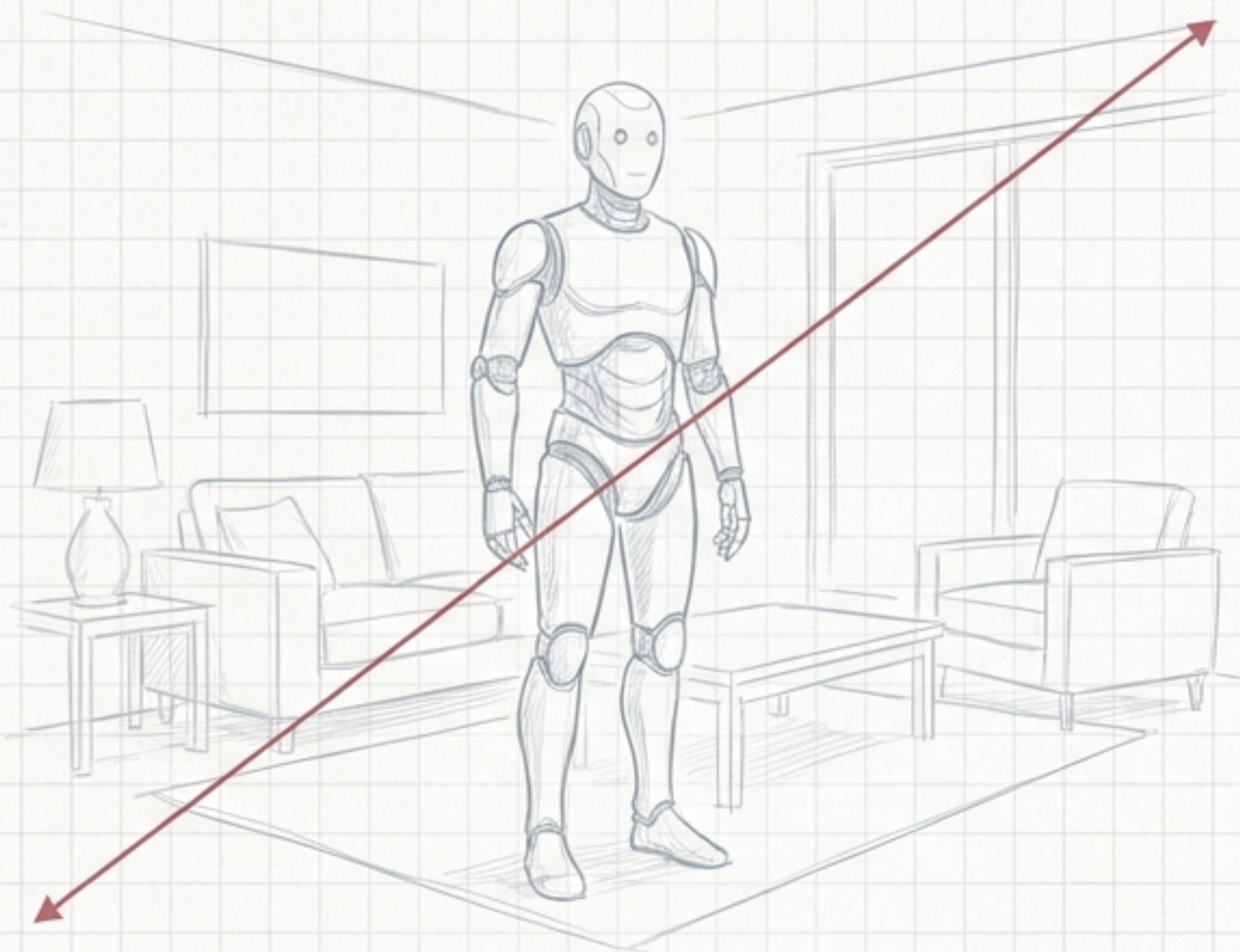
自変量ロボット (X Square Robot) 調査報告

「ロボットの脳」を鍛えるデータ戦略の全貌

2026年5月5日現在

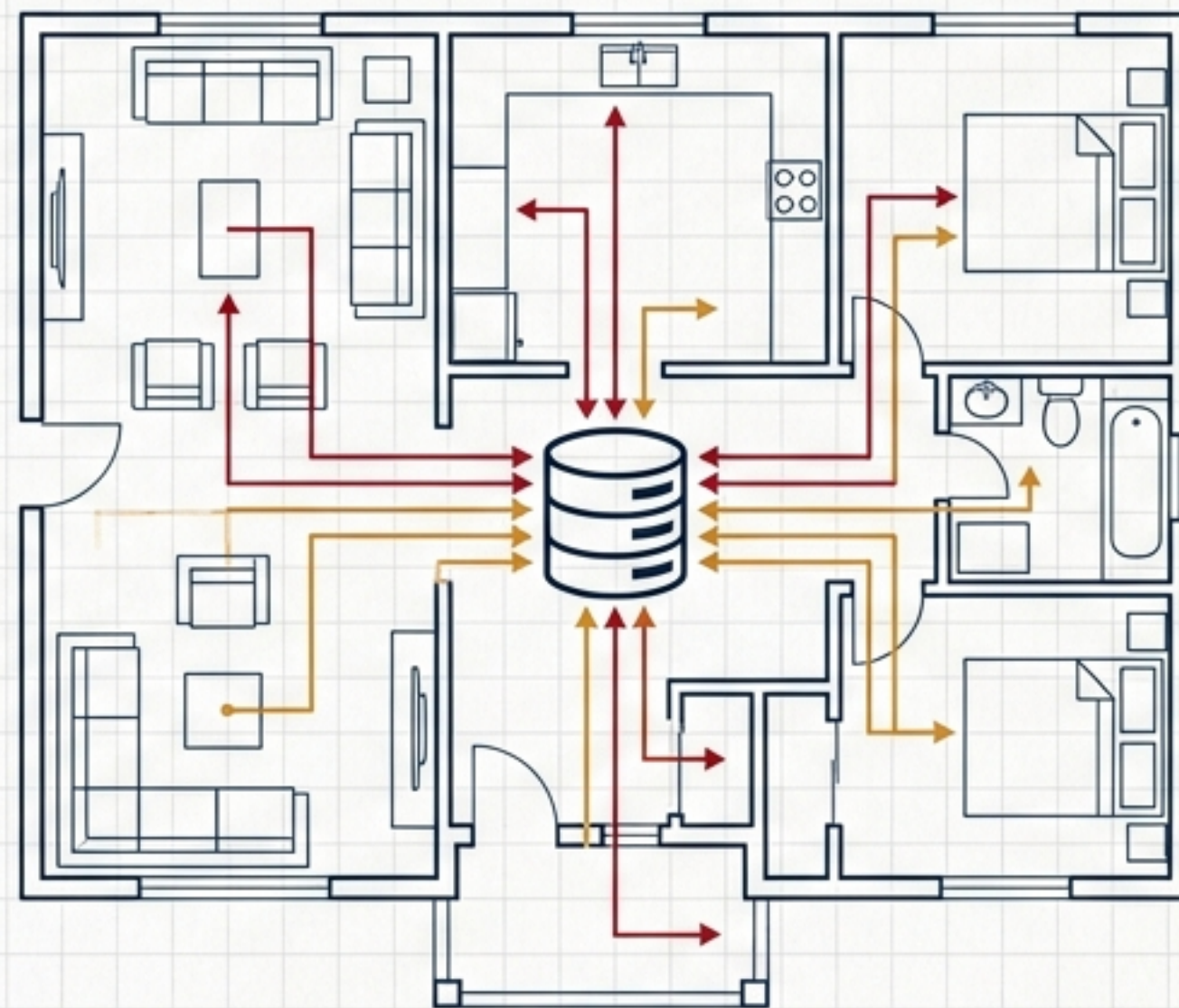


ILLUSION



メディアの表層：家庭用ロボットの量産企業

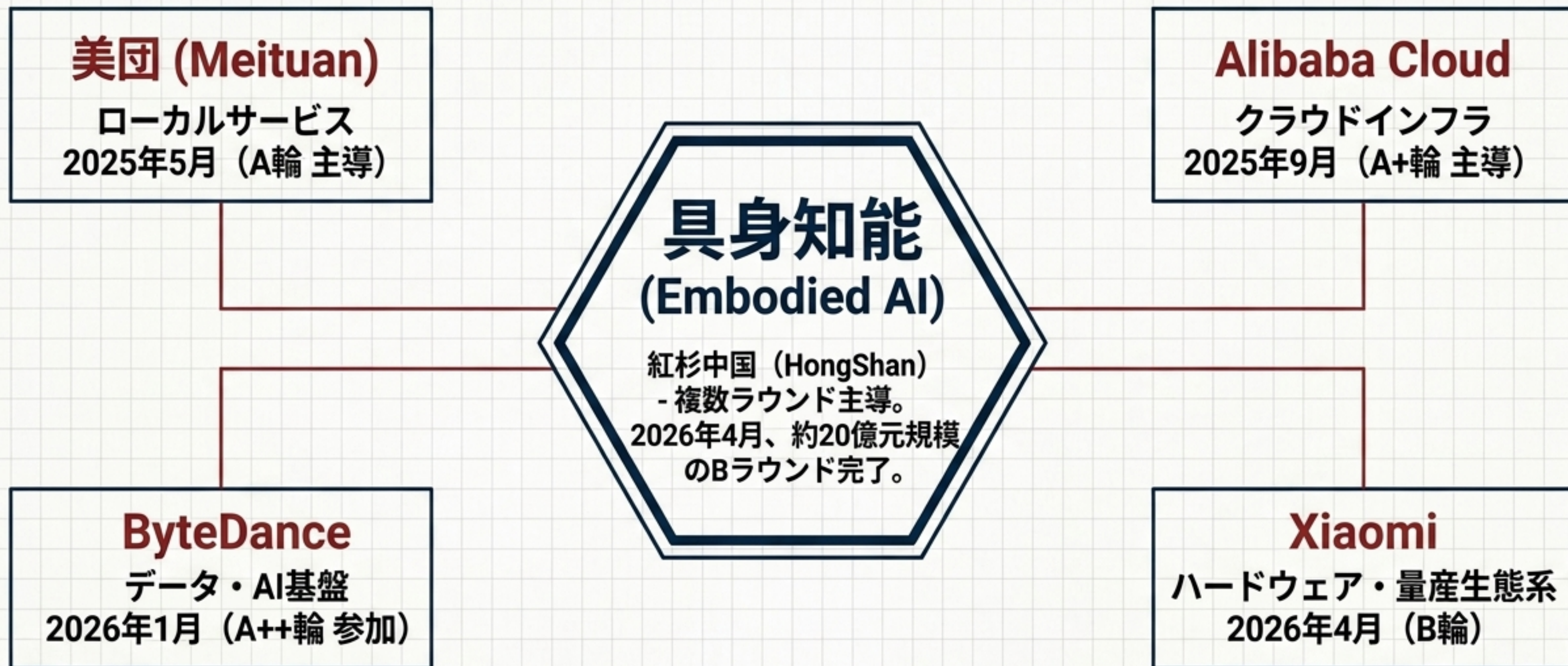
REALITY



戦略の実態：物理世界の基盤モデルを鍛えるデータ企業

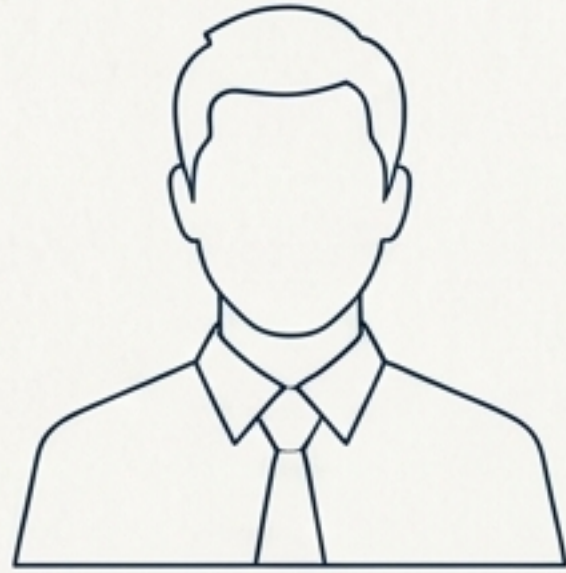
X Square は、二足歩行の派手なデモを捨て、「家庭を実データ収集場に変える」ことでAIモデル（脳）の進化に資本を集中させる長期戦プレイヤーである。

中国ネット4大巨頭が描く「具身知能」の完全包囲陣



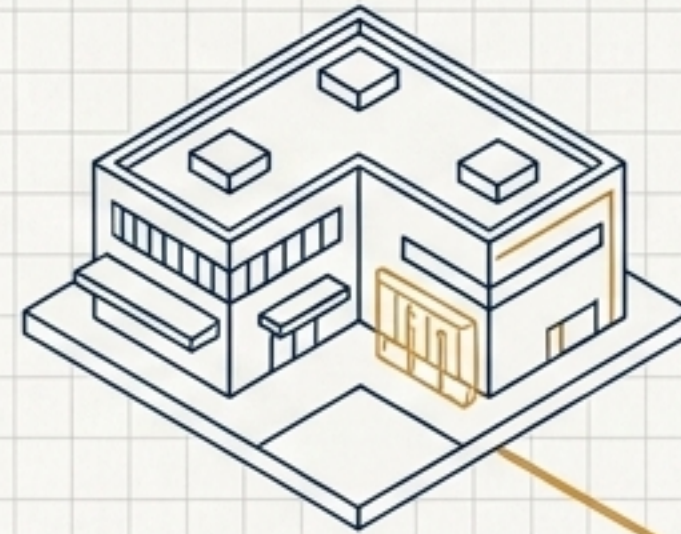
*登記上の株主名簿は複数法人に跨る可能性があり、「4社同一名簿」ではなく「投資家布陣としての集結」と捉えるべきである。

複数法人体制と創業者 王潜（Wang Qian）のDNA



王潜（Wang Qian）

清華大学・南カリフォルニア大学出身。米国での量的運用（クオンツ）ファンド運営経歴。ハードウェアの売り切ではなく、データに基づく「長期的なモデル競争」を志向する背景。



深圳法人（2023年9月設立）
研究開発と南方の実証拠点

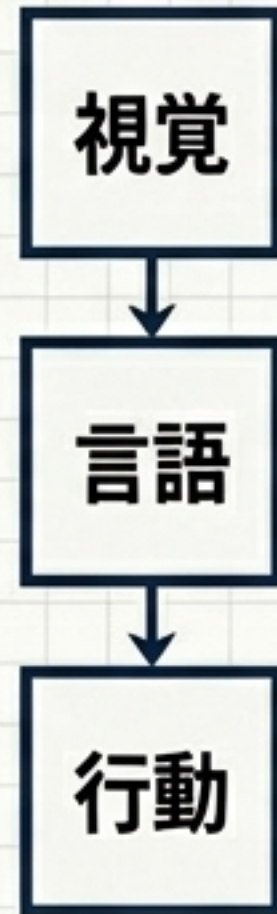
濟南法人（2023年12月設立）
2026年2月にAlibaba Cloudが
新株主として登記された工商主体



インサイト: ブランド年表と登記年表のズレは、用途や投資家に応じた複数法人での事業推進を示唆。

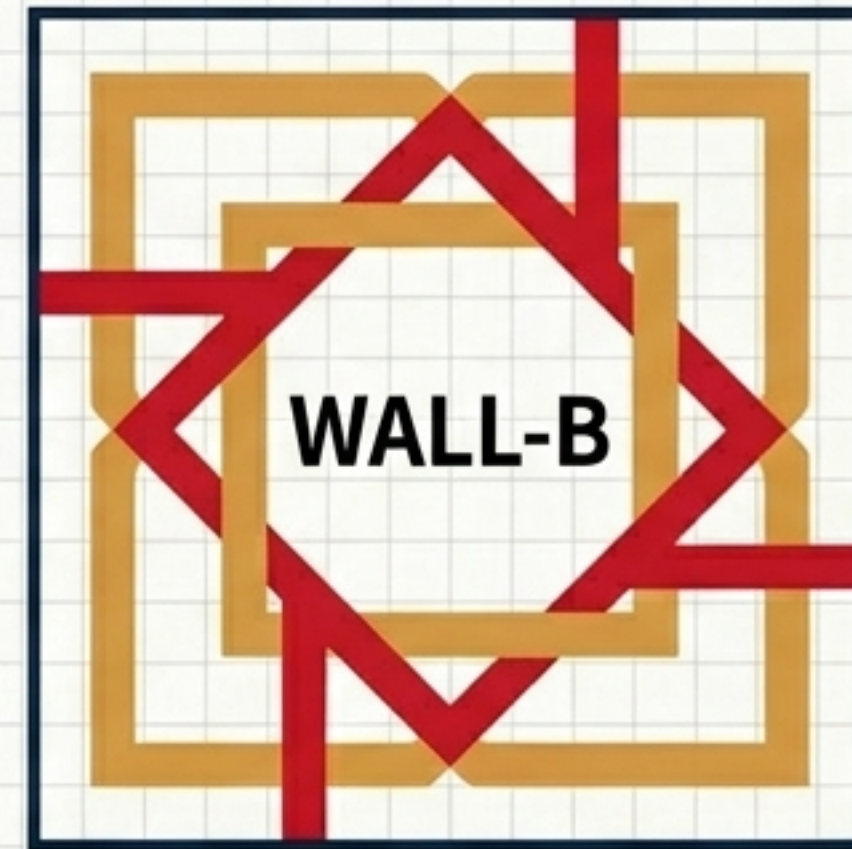
エンドツーエンドの統合脳：WUMアーキテクチャ

従来型 VLA



視覚、言語、行動を別モジュールで構築し連結。

X Square: WUM

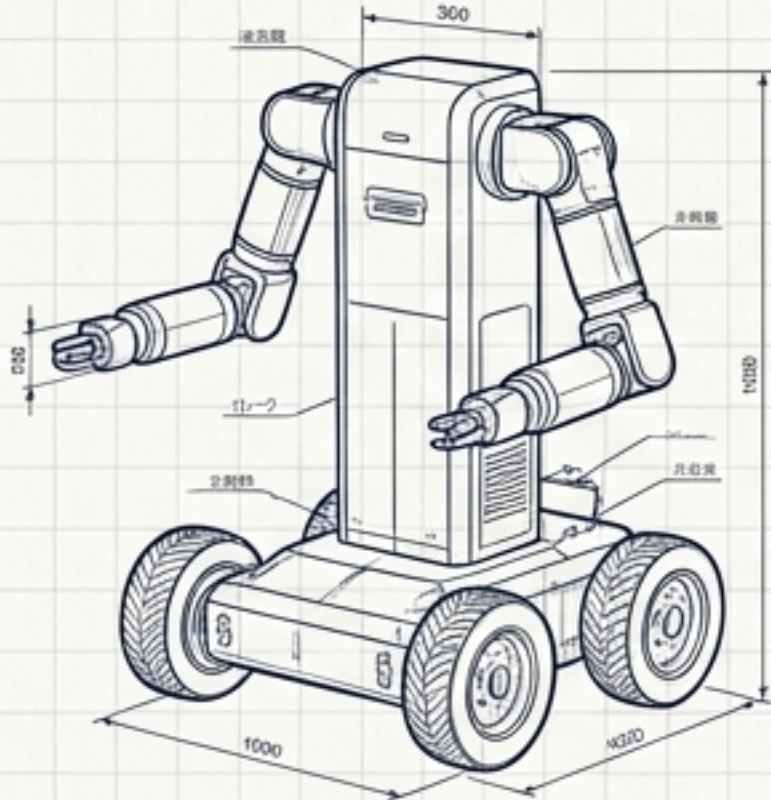
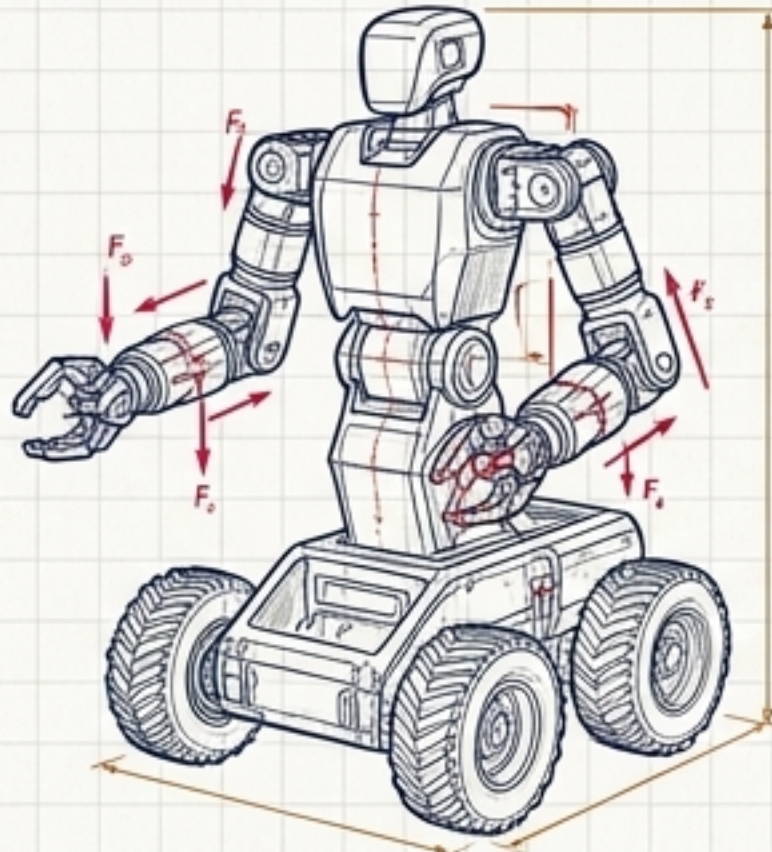
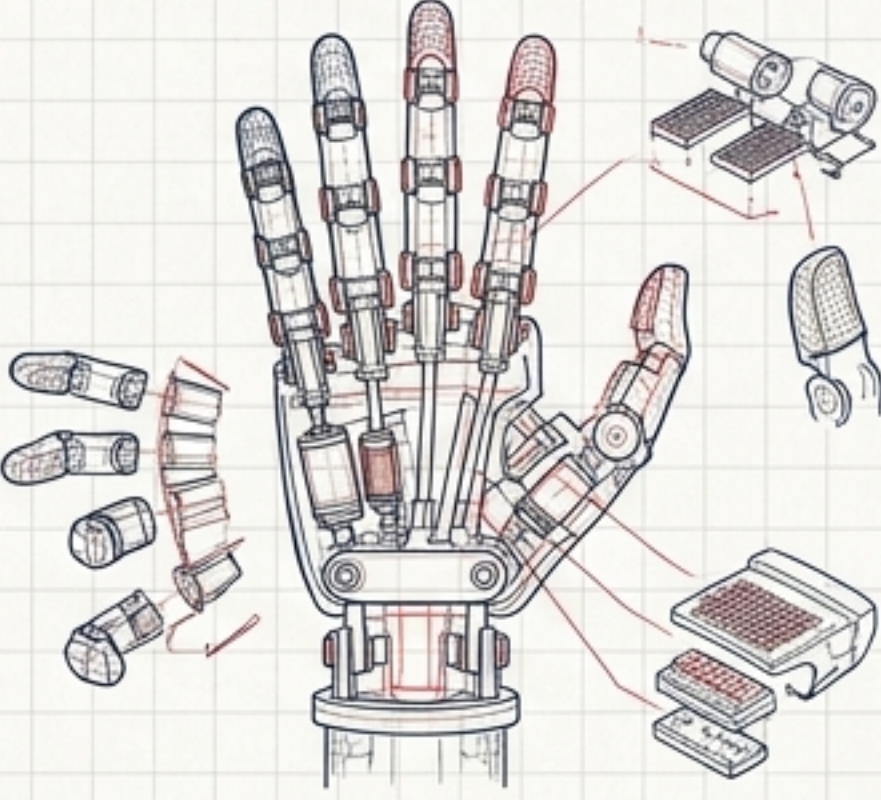


WUM (World Unified Model) 。2026年4月21日発表。
視覚・言語・動作・物理予測を最初から単一の系で学習。

エコシステム戦略

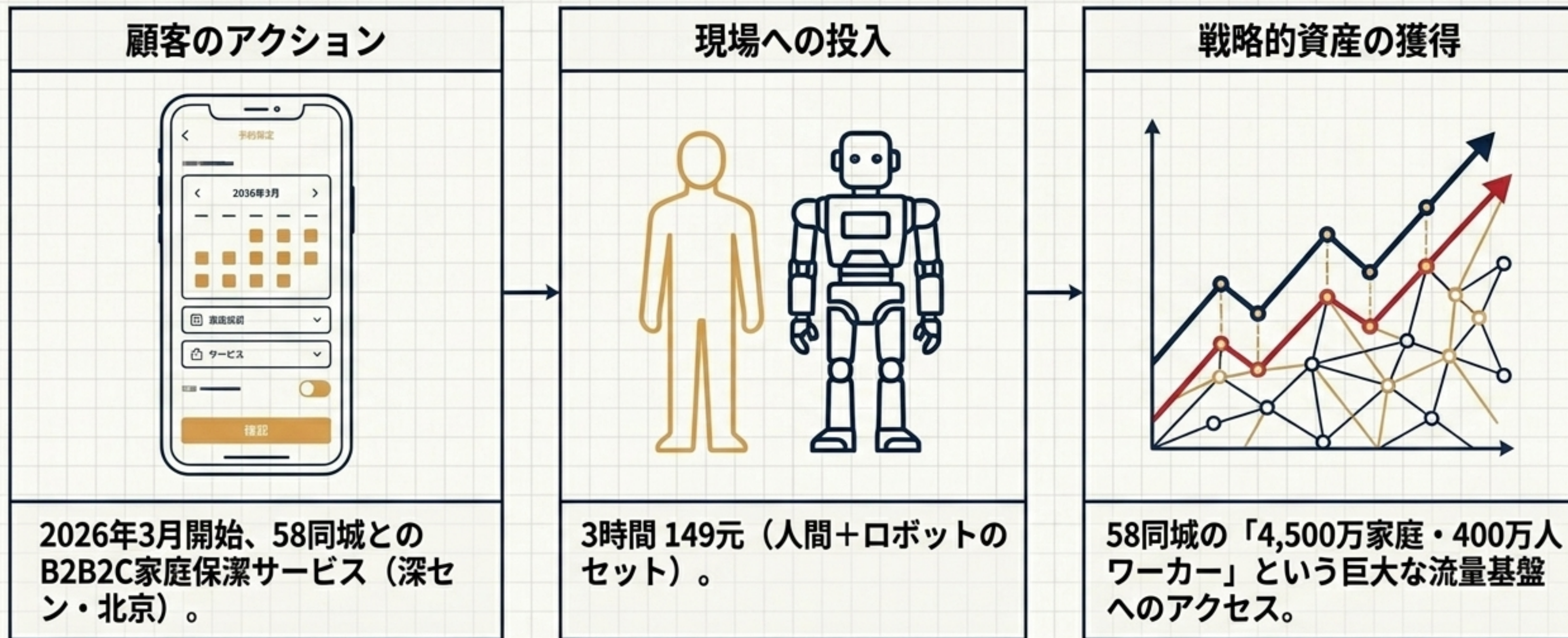
2025年にWALL-OSSをHugging Face (LeRobot) に統合。
CVPR 2026 ManipArenaで20の真機タスク、188時間の実データを提供し、業界標準化を狙う。

見栄え（二足歩行）より可用性（車輪型）を優先するハードウェア群

Quanta X1（研究・教育用）	Quanta X2（現場投入用）	ArtiXon Hand（巧緻性の内製化）
		
<ul style="list-style-type: none"> • 輪式双腕 / 身長97cm / 20自由度 • 稼働4-6時間 • 役割: 遠隔操作・データ収集プラットフォーム。 	<ul style="list-style-type: none"> • 輪式仿人型 / 身長164cm / 62自由度 • 最大25kg(双腕) • 役割: 家庭・商業清掃・物流での実務遂行。 	<ul style="list-style-type: none"> • 五指ハンド / 20自由度 / 15アクチュエータ • 指先触覚 • 役割: 柔らかい物体の精密把持。「脳」だけでなく末端の感覚を自前化。

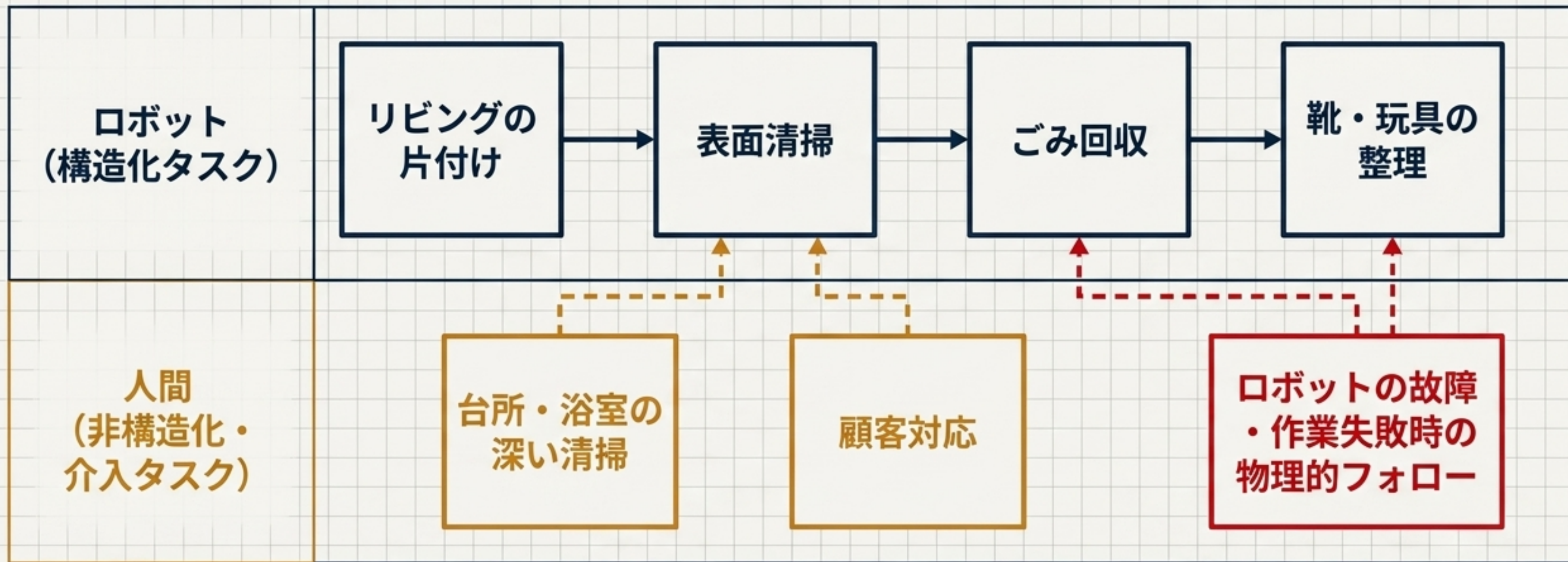
戦略的合理性: 「人間に似せる」ことより、現場で倒れず反復学習できる「車輪型」を選択。

市場投入の現実：「ロボットの販売」ではなく「協働サービスの提供」



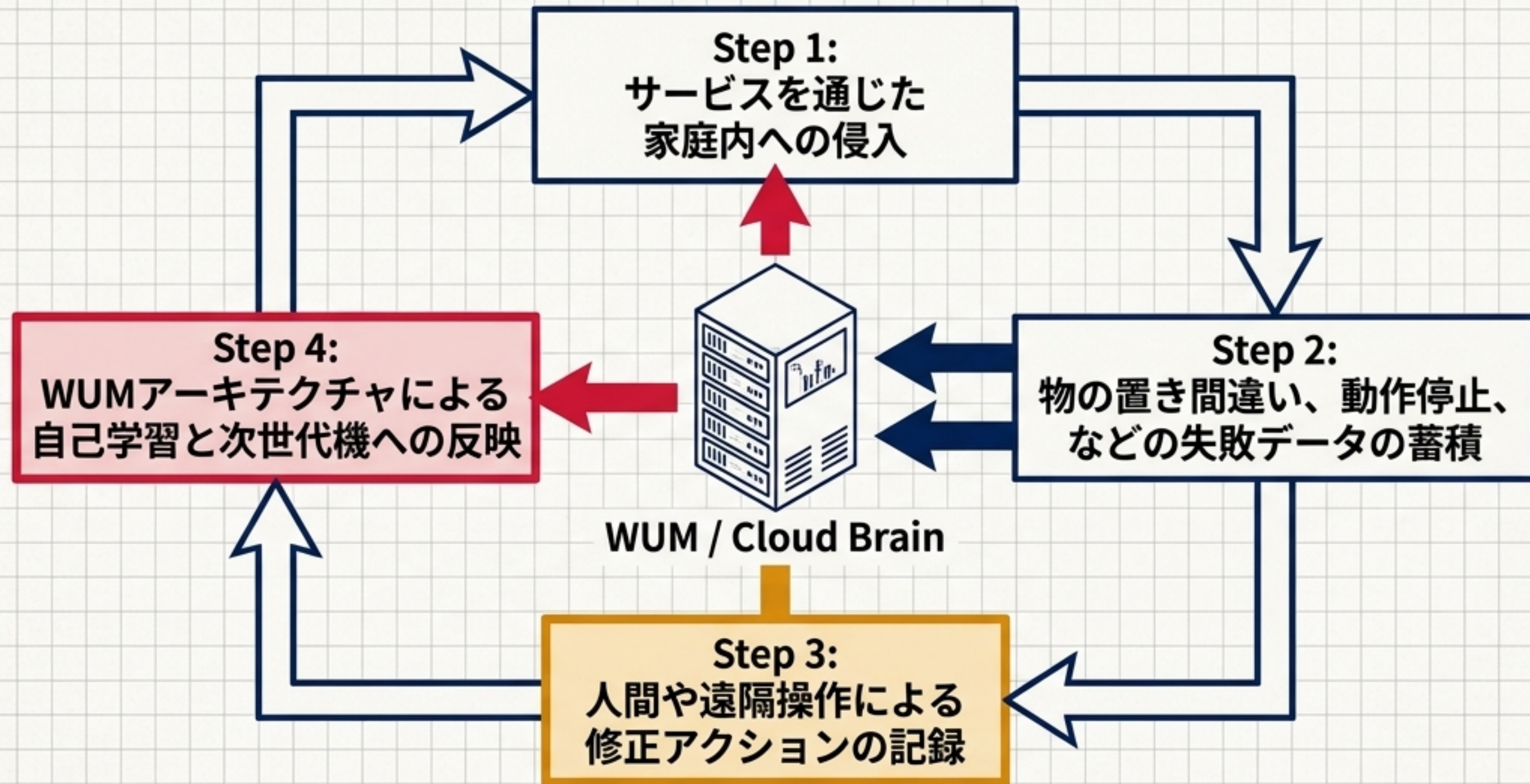
一般消費者に未完成のハードを売るリスクを回避し、サービスとして提供することで継続的なデータ回収パイプラインを構築。

人間を「安全弁」とするタスク分業体制



インサイト: ロボット単体での完全自律化には程遠く、人間を現場の「セーフティネット」として組み込むことでクレームを防ぐ現実的なオペレーション。

真の商品: 「実環境データ収集パイプライン」



Core Insight: 清掃の売上は副産物。真の価値は、競争優位の源泉となる「人間の生活空間の生データ」を他社より早く刈り取ること。

現場実証のリアル: 誇大広告と現在地のギャップ

Deployment Scale (普及規模)



Current Weaknesses (現在の弱点)

⚠ Card A

速度の遅さと動作のぎこちなさ。

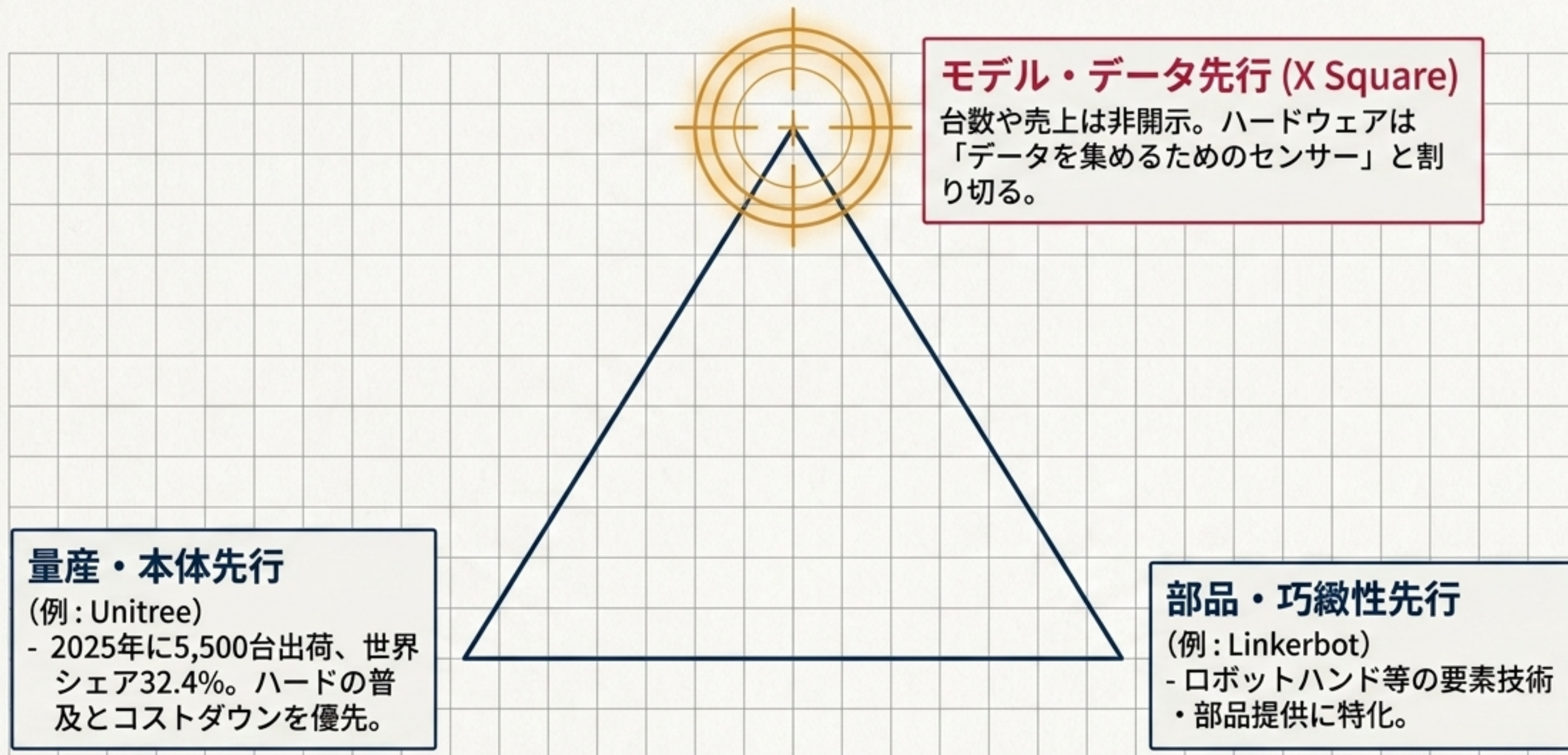
⚠ Card B

完全自律は不可。遠隔介入（テレオペレーション）への依存。

The Reality Check (実態)

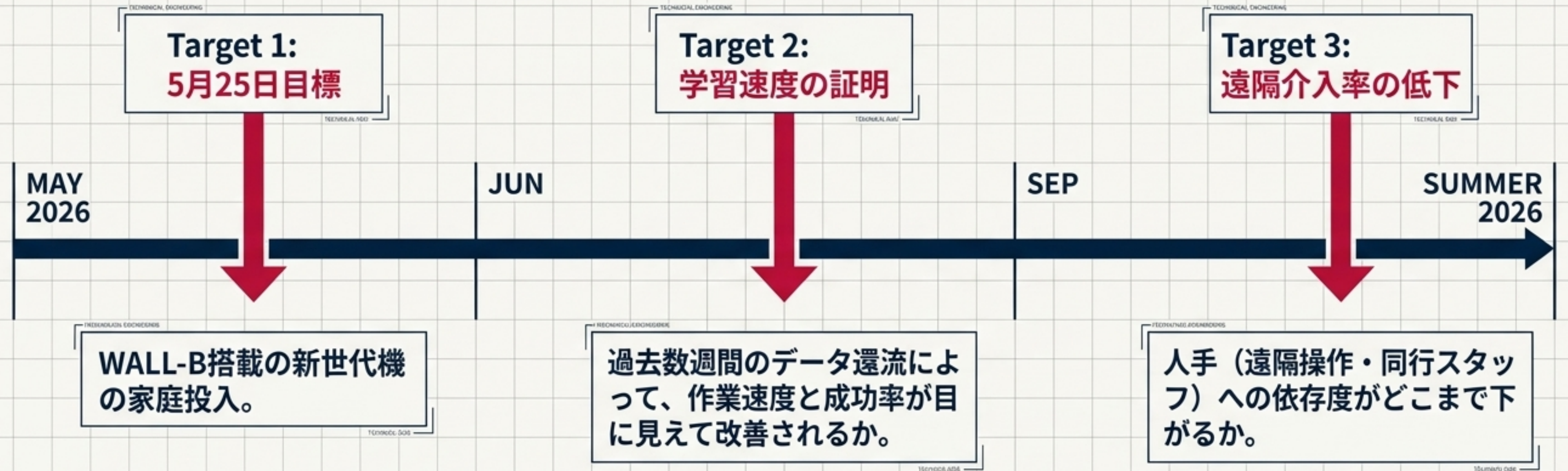
「役に立つが、人間の置き換えには遠い」。現在は販売フェーズではなく、100を超える家庭データをWALL-Bに学習させる「加速学習フェーズ」。

中国具身智能市場におけるポジショニング



インサイト: X Squareが出荷台数を競わないのは、勝負の土俵が「ハードウェアの量」ではなく「基盤モデルの質」だからである。

直近の検証マイルストーン (Short-term Catalysts)



Takeaway: これらの触媒が不発に終われば、四巨頭の出資は「未来への過剰な期待値」に留まる。

証明された胆力と、未解決のリスク

証明済み (Proven)

- ☑ 強力な資本調達力とエコシステム構築。
- ☑ 未完成のまま家庭にロボットを入れる胆力。
- ☑ 人間との協働による現実的なサービスモデル。

未証明・リスク (Unknowns)

- ⚠ ROIの成立（149元の料金で、ハード・人件費・通信費をカバーできるか）。
- ⚠ プライバシー統制（画像のリアルタイムマスキング等は主張するが、外部監査・認証は未確認）。
- ⚠ 大規模量産時のハードウェアの安定性。

監視すべき財務・ビジネス指標

Indicator 1: Bラウンドの公式開示

累計調達額と持分変動の詳細（複数法人間での権利関係を含む）

Indicator 2: ユニットエコノミクス

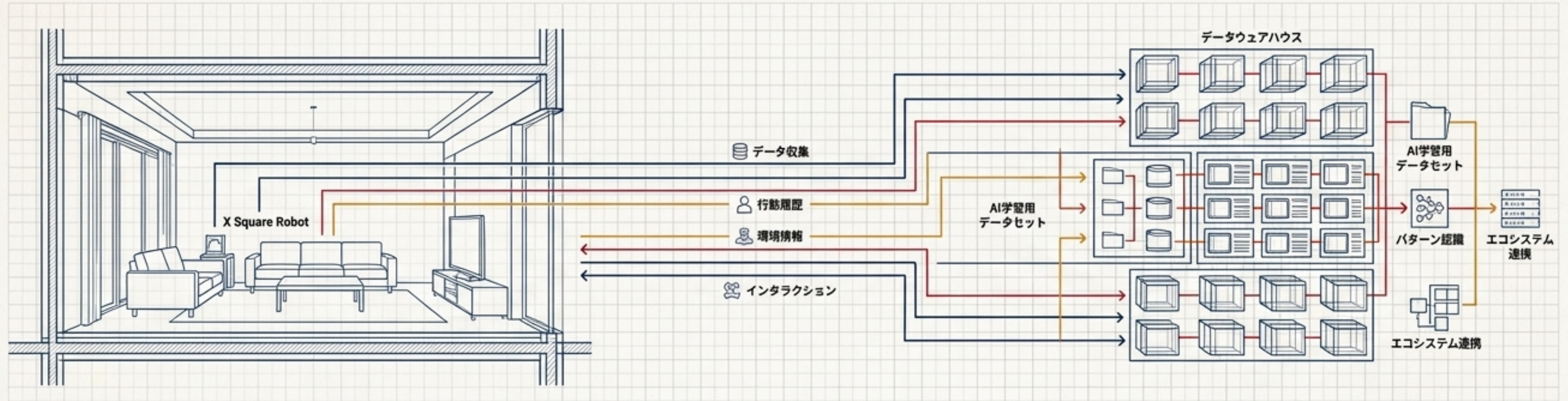
清掃サービスにおける1件あたりの利益率と顧客獲得コスト。

Indicator 3: 初期収益の内訳

会社が主張する「教育、ホスピタリティ、高齢者ケアでの初期収益」の具体規模。

インサイト: これらの開示が進むことで、「話題の新興企業」から「真の基盤モデル企業」への脱皮が確認できる。

結論：一般家庭を「学習環境」に変えた資本力



- X Square Robotの真のイノベーションは、ロボットの造形ではなく「データ収集の仕組み」にある。
- ネット4大巨頭の資本とエコシステムを背景に、彼らは最もノイズの多い「一般家庭」という環境を、自社専用の巨大なAI学習ラボへと変換した。

ハードウェア競争がコモディティ化に向かう中、X Squareが蓄積する「物理世界の生データ」こそが、次世代AI覇権の最大の防壁となる。